











夏から秋にかけて

2025年5月の個展が終盤に差しかかった頃、「ライフライン」展のキュレーターである福元さんから、茨木市の文化施設の建物が解体されるまで、その施設を利用して展覧会を企画しているので参加しないかとお誘いをいただいた。

6月に入り建物の下見に。地上5階・地下2階の館内を一通り見て回ったところ、福元さんから「国谷さんには5階のシアターを使ってほしい」との提案があった。展覧会全体の順路は、5階から地下2階へと“上から下へ”降りていく構成になっている。上から下へと連なる垂直のラインと、5階のシアターの舞台と客席に框を境界とするラインの存在を強く意識することになった。

本展のタイトルである「ライフライン」は、平時にはそれほど意識することは無いが、何らかの事態が生じた際にはその存在の重要性が浮き彫りとなる。ここからライフラインを「生きる中であまた存在する線」と広義に再解釈する事で展示イメージが直感的に見えてきた。

そこで、昨年より発表しているネオン管の文字列を伏せて床に置く作品を5階のシアターで展示したいと相談したところ、すぐに賛同が得られた。その際、福元さんからは5階の映写室・調光室・音響調整室のエリア、さらに地下1階奥の自転車置き場の使用も提案された。こうしてぼくは、施設内の3つの空間で4つのシリーズ作品を展示することになった。5階のシアター以外の2箇所のスペースに関しては、7月に福元さんがスタジオビジットに来られた際に何をどの空間に展示するか話し合っただけで決定した。そして、空間をどのように解釈し構成するかについては、ぼくに委ねられた。5階の映写室・調光室・音響調整室のエリアでは、再度、下見に行った際に映写室の左右の部屋の扉の上に「調光室」と「音響調整室」という名盤を見つけていたので、「Air Conditioner」という作品を展示することにした。目に見えない気体のような存在を“調整する彫刻”として、この空間から始まり、微小ながらも建物全体の空気を動かすように接続していく——そんなアイデアが、この場所にふさわしいと感じた。そこで、地下1階のスペースには、「Spaceless Space」のシリーズと「MirrorSite」のシリーズを展示することにした。展示空間に入って正面の壁面がブロック塀であったため、そこに「Mirror Site」を配置することで“グリッド・オン・グリッド”の壁面を構成することにし、入口側の壁面にかつて何か貼り付けられていたと思われる横並びの三つの矩形の接着剤痕を見つけたことから、それと同サイズほどの「Mirror Site」3点を展示することにした。

「Spaceless Space」の展示場所である自転車置き場には床面に太い白線の矩形が描かれてあった為、天井より吊す展示にした。しかし、これでは線状の作品を単に空間内に付置

していくだけで、そこに意味を見出すことができないと感じていた。数日に分けて作品のインストールを行っていたある日、誰もいない一階のベンチで天井を眺めながら寝転んでいたところ、ある考えが浮かんだ。「展示のオープンの季節と地面より下の空間に作品を設置する」そして、「展覧会の順路の縦のライン」それらのことが頭の中で接続され、展覧会開催期間の秋の空にある星座の座標を付置するアイデアが浮かんだ。すぐに携帯に方位磁石のアプリをダウンロードし、方角と星座の位置をマスキングテープで付置してみたが、今度はこれらの方角とマスキングテープで付置した配置に対してその正確さが気になり始めてきた。すると、搬入スペースを通りがかった市職員の田中さんが「茨木市にはプラネタリウムがあるので、そこの天文解説員を呼んできませんか。」と言って天文解説員の方を連れてきてくださった。早速、彼女にアイデアを話し、状態確かめてもらおうと、「合っています」ということだった。この言葉で地下一階の展示はもう完成したと思った。

透明な冷気がすべてを包み込む12月中頃、締め切りに追い立てられながら、夏から秋へと時間を遡ってテキストを書いている。ここでもまた、季節というものの接続、そして時間という一本のラインが姿を現す。それをどのように捉えるのか——「生きる中であまた存在する線」を意識した。

国谷隆志



